

## 『敗戦真相記』を読む/太平洋戦争の「敗因」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも残り16回。「軍事学/地政学」シリーズの2回目は、終戦直後の広島で行われた永野護氏の講演録、『敗戦真相記』にある太平洋戦争の主要な「敗因」の確認です。また次回からはその要因を個々に掘り下げ、マネジメントへの教訓を抽出していきます。

### その1:「太平洋戦争」の基因

氏は、「この戦争の根本的な原因は、日本の国策の基本的な理念が間違っておったこと」と本論の口火を切ります。そして国や軍の幹部が口先では万邦共栄というようなことを言いながら、肚の中では日本だけが栄えるという「日本本位の考え方」をあらゆる国策の指導理念にした。すなわち開国以来の自由通商主義をいつの間にか忘れ、日本の利益のみを目的とする「自給自足主義」を大東亜共栄圏建設の名目で強行したということが、今度の戦争が起こった根本的な原因であると説きます。

またその戦争の胚子を大戦争に育てた要因として、「日本の指導者がドイツの物真似をした」「軍部が己を知らず、敵を知らなかった」「世論本位の政治をおこなわなかった」の3つを挙げています。

### その2:「敗戦」の要因

続いて氏は、その発生の原因自体に内包されている、「敗戦」の要因へと話を展開します。

その第一は、前述の如く「公明正大な目標」を欠いていたこと。実際は大東亜諸国どころか、足もとの自国民をも十分納得させられなかったのですから、開戦当初の一時期を例外として、「総力戦」とはほど遠い状況であったことがわかります。

第二は、「慢心」。日清・日露戦争の勝利?に驕り、「軍部が自己の力を計らず、敵の力を研究せず、ただ自己の精神力を過大評価したこと」。自国が近代戦の端緒を開きながら、その「情報戦」「科学戦」「消耗戦」という本質に目をつぶったまま、無謀な戦争へ突入してしまいました。

そして第三は、「指導力」。軍の指導者が国民の良識や感覚を無視して、自分のいいと信じたところに国民を連れていこうとしたこと。またそれを批判する人間を姑息な手段で圧殺して独善に輪をかけ、戦争を徒に長期化させたことが、被害急増というさらなる悲劇を招いたのです。

### 参照 『三々な経営』

2-10 経営理念の意義  
3-26 原因の3分類と究明

### 参照 『「四字熟語」で考える経営戦略』

Y-06~7 「経営理念」を考える・その1~2

### その3:「敗戦」の真因

さて『敗戦真相記』は、ここからが真骨頂。氏は「国民の非効率」や「官僚の独善」など、他の敗戦の諸要因を上げた後、いよいよ「真因」に迫ります。

それはまず、「英米の科学の進歩」から。氏はそれを「目に見えるか否か」で二分します。その「見える」例は、レーダーや原爆という科学兵器や土木機械などですが、ここで氏が特に強調しているのは、「科学的マネジメント」という「見えない」差。それは「米国の物量に敗けた」という対極の議論を払拭し、私たちが敗戦の「真因」へと導きます。

また次なる「陸海軍の不一致」も、「マネジメント」絡み。英米という二大国を相手にしながら、「不一致」どころか、陸軍と海軍が次元の低い「内戦」もどきを繰り広げた事実を知るとき、我が民族の「国」という概念の狭小、脆弱さを思い知ります。

さらにそれが「日本有史以来の大人物の端境期に起こった」という嘆きからは、長期的な人材育成という「経営能力」の欠如を痛感させられます。

今回最後に確認しなければならないのは、私たちがその後も「敗戦」を繰り返した「真因」。それを予知する氏は、講演冒頭で警告を発しています。

すなわち「本当に敗けたという気になれない」ため、「敗因」を自分の中に求めず、外部や第三者に求め、「内部の真因」と向き合わないこと。

そして、「歴史は繰り返す」(つねに悲劇として)

2022年9月26日 実空